

---

# 不思議な不思議なCO2

新開地翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議な不思議なCO2

### 【Zコード】

Z7692V

### 【作者名】

新開地翔

### 【あらすじ】

僕のサイトから転載したものです。

いじめられっこ斎藤にバカにされ続けている高彰。そんな高彰が斎藤に取った行動とは？

新開地翔のオリジナル作品、記念すべき（？）第一作目です。

クソ暑い池袋駅で俺は座っていた。イライラしながらコーラを飲んでいた。

右を見ても左を見ても、カップル、カップル、カップルな土曜日の池袋駅。

（クソツクソツ、リア充爆発しろ！死ね！）とにかく俺はイライラしていた。

\*

あれは昨日の事。朝、遅刻ギリギリで学校に着いた俺は、大慌てでいつものように下駄箱を開けた。するとそこには何やら封筒みたいなモノが一つ。淡い桃色の封筒には、丁寧に可愛らしい人気キャラクターのステッカーで封がしてあった。

ホームルームが終わってから、トイレの個室でこっそり中身を確認する俺。

Dear 高彰

この高校に入学した時からあなたが好きでした。お返事が欲しいので、今日の放課後、大クスノキの下で待っています。

From 真利香

封筒と同じく淡い桃色の小さな便箋にはこつ書いてあった。

ラブレター。

俺には初めての経験だつた。ベタなシチュにベタな内容。それでも俺は大空を飛んでいるような錯覚を覚えるほどの喜びに、トイレの中で酔いしれていた。

しかし放課後、約束の大クスノキの下に行ってみると、そこに『真利香さん』の姿は無かつた。代わりにいたのは、

「よつ、バカアキ」クラスのリーダー格、齊藤だった。クラスの中で一番モテて喧嘩が強いが、なまじ勉強ができることから教師からも特に咎められることのない……そんな奴だ。

「フン、たっぷり可愛がつてやるぜ……」そのセリフを聞いて、俺は次にされることを大方理解した。 ぶん殴られると。

\*

昔から殴られることには慣れっこだ。俺は昔から苛めの対象なのだから。俺が殴られたところで、困る奴は俺を含めて誰一人いない。それに、どうせ学校教師は事なき主義の連中ばかりだ。俺がチクつたところで、「お前が何かしたんじやないのか?」とかなんとか言われるのが関の山なのは、小学校の時の経験から分かっていることだ。つまるところ、俺はどの道殴られる為の人間なのだ。

でも、昨日の件だけは別だつた。俺を殴る、そんな下らない理由で、恋愛経験ゼロの俺を嘘ラブレターで騙して下さつたのだから。普段めつたに怒らない俺の腸はらわたは、今日になつても溶岩の如く煮えくり返りまくつていた。

そんなイライラしている時に、姉からの間の抜けたセリフ、

「今日、池袋のファシュランでジョラートの安売りがあるから、タツ君買って来て。じゃ、お願ひね」

と来たもんだ。うるせえ! と罵倒するもむなしく姉から財布を投げつけられ、家を追い出された。

それで俺はイライラしながら、アイスクリームがたっぷり入った保冷バッグを持って、池袋駅でコーラ片手にボーッと電車待ちをし

てりるといつわけである。昨日の出来事が出来事なだけに、周りのイチャイチャカップル祭りが一層俺のイライラを引き立てていた。

そのカップルの中に、見慣れた男と見知らぬ女の子のカップルがいた。二人は抱き合つているように見えた。女の子は美人だつた。ほつそりとしているが女性特有の丸みを帯びた身体、お人形のように整つた愛嬌ある顔、黄色いワンピースがよく似合つていた。そしてその相手、見慣れた男性は……間違いなく齊藤だつた。

散々俺を馬鹿にした挙句、こんなところで女とイチャついているアイツを俺は許せなかつた。俺は急いでコーラを飲み干す。そして空になつたペットボトルに、俺はジエラートに添付されたドライアイスを無我夢中で入れていった。自分が何をやつているのか、自分でも分からなかつた。だが、今まで馬鹿にされ殴られていたことを思ふと、それくらい安いことのように思えた。少しくらいワルになつても許されるような気がした。後は蓋を閉め、あの野郎目がけて投げれば终わりだ。

だが、俺のターゲットはあくまでも『齊藤』だ。『カップル』じゃない。被害者が増えることを俺は望んでいない。目的は齊藤のみ。だから俺は叫んだ。

「その黄色いワンピースのお姉さん、よけて！」

叫ぶや否や、俺は齊藤に向かつて『爆弾』を投げた。七百五十倍に膨れあがつたドライアイスと、落下した衝撃に耐え切れず、ペットボトルは爆ぜた。

\*

見事にボトルが碎けた瞬間、俺の頭は真つ白になつていて。

「駅員さん、お巡りさん、こつちです！」

その声を聴いた瞬間我に返つた俺は、大惨事のホームを尻目に猛進した。

「あ、待ちなさい！」追いかけてくる警官らしきオッサンたち。

逃げ足には自信があつた。小さい頃から、無駄に足だけは速いのだ。S U i c o c a<sup>スイコガ</sup>でタッチ&ゴー。俺はサンシャインビルの方へと駆けていった。

警官たちは鬱陶しくもまだ追いかけてくる。しかし、彼の表情には明らかに疲れが見え隠れしていた。

（ハハツ、さまあ）

警官とはいって四十を超えたオッサンだ。十代青春真っ盛りの若者の足には敵わないのだろう。俺は今なお全力疾走だ。

そのスピードを保ちながら、俺は高くそびえるサンシャインビルへと逃げ込んだ。そして迷わず、室内テーマパークの人混みに紛れ込むことにした。三百円の無駄な出費が出てしまったが、奴らを巻く為なら安い額に思えた。僕はパーク内のアトラクションの方に向へと足を運んだ。人混みは好かないが、混んでいれば混んでいるほど、俺の存在は目立たなくなるからだ。しかし、テーマパークたるものには必ずデート中のカップルがいるわけで、俺が人混みの中で池袋駅の時と同じイライラを味わったのは言つまでもない。

\*

俺はいつの間にか、下らないことこの上ないライド系アトラクションに乗り込んでいた。正直、早く降りたいというのが本音だった。しかし俺は大事なことを考慮していなかつた……出口で奴らが待ち伏せている可能性を。

マヌケ。この一言に尽きる。

気付いた瞬間、俺は全身から血という血が引いていく、そんな感覚を味わつた。その熱いような寒いような感覚が、むしろ小気味よくすらあつた。

そんなスリリングな感覚を味わつていううちにアトラクションが終わつた。こんな下らないアトラクションに、もつと長く乗つてい

たいと心から思つたのはおそらく初めてだろ？

ちやちな車に後ろ髪を引かれながら俺はアトラクション出口へと向かつた。アトラクションブースを出ると同時に、俺はキヨロキヨロと辺りを見渡してみる。幸い追つ手らしき人はどこにも見当たらなかつた。

（ふう、どうやら杞憂だつたよつだな）そう思つたのも束の間、『背後から』低めの声が響く。

「やあ、ちょっとといいかな」

恐る恐る俺は振り向く。そこにはただのスーツを着たオッサンが一人突つ立つていた。

「……何ですか」俺は軽く舌打ちしながら、氣怠さ全開で返答する。「いや、僕、警視庁の者なんだけどさ、」テンプレの警察手帳が一冊。「君、四十分前に池袋駅にいたよね？」

私服警官。状況からしてそれ以外にはあり得ない。

（……やられた）俺は完全に敗北を悟つた。

「じゃあ、池袋署の方へ同行願おうか」

もう、全てを失つたんだ。

完全に諦めて、俺は警官におとなしく連れて行かることにした。

\*

警視庁池袋署にて。

俺は啞然としていた。今の状況が全く理解できなかつた。

「感謝状、安藤高彰殿！」署長が高らかに感謝状を読み上げる。さらに、副署長は膨らんだ熨斗袋のじぶくろを手に持つていた。『金一封』と書かれている。

どうやら俺はお巡りさん達に感謝されちやつているらしい。ただ、その理由がさつぱり分からない。

「あのー、感謝状つて……」

「つかー、君も人が悪いね！ 池袋ナンパ魔が早々に捕まることに

なつた。これに君が貢献したからに決まつてゐるじゃないか！」

「……は？」まるで意味が分からぬ。

「ほら、あの斎藤っていう学生だよ。全く、高校生のガキの癖して、池袋の女という女を強引にナンパしては、その、何だ、い、いかがわしいことをしてたんだとよ」

「で、でも、俺……」

「確かに行動 자체はやり過ぎだったかもしれない。でも、その勇気ある行動が我々警察、そして一人の女性を救うことになつたのだよ」警官が笑顔でそういうと、一人の女の子がドアから出てきた。

「おっ、事情聴取は終わつたかね？」

「はい」笑顔で女の子は答える。先程の『斎藤の相手』だった。「助けて下さつてありがとうございました！」もしあの時、あなたがボトルを投げて下さらなければ、私はどうなったことや……」「女の子は俺の方を向いて言った。

「あ……いや……ハハ……」俺は引きつった作り笑顔をするより仕方なかつた。

「それで、あの、お礼と言ひてはなんですが……」少女は顔を真つ赤に染めて言つた。

あれから一ヶ月。

あの日以来変わったこと。

まず、俺に対する苛めは無くなつた。むしろあの出来事以来、俺は一田置かれる存在となつてしまつた。

「あの斎藤をやつつけたらしいぜ」

「あの苛められっ子、結構やるんだなあ

「正義の味方つてやつか」

「確かにスカしてたもんな、斎藤」

ちなみに問題の斎藤は強制猥褻だか何だかの罪で捕まり、今は裁判所で裁きを受けている。少年ということもあり、そんなに重い刑にはならないとは思うが、場合によつては懲役もあり得るのだと。既に斎藤は学校を退学しており、彼の家族は東京から離れた田舎町で暮らしているといつ。

それからもう一つ変わったこと、それは……

「ゴメン、待つた？」女の子は俺に謝る。黄色いワンピースがよく似合つている。

「いや、俺も今来たばっかだからね」

「じゃあ、どこ行こつか

「そうだな、ファシュランでアイス食べて、サンシャイン水族館に行つて……」

「うん、いいコースじゃない」

あの日、事情聴取が終わつた彼女に食事に誘われ、そこで意氣投合し付き合つことになつたのだ。

ちなみに、ちゃんと真相を正直に話した。でも、彼女は信じてくれなかつた。

「だつて、タッキーは由紀の味方じやん」の一点張りである。

(……ま、いっか) そう思つようになつて以来、自分からはあの事件を蒸し返さないことにした。

「ねえねえ、早く行こよー」

「分かつた、分かつたから体を揺らすな

不思議な不思議な池袋、高くそびえるサンシャインでの事件。今となつてはいい思い出だと俺は思う。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7692v/>

---

不思議な不思議なCO2

2011年10月9日14時18分発行